

授業概要

言語は形式と意味が結びついたものであることは論を待たないが、一般的で基本的な文、例えば John likes Mary. という文の意味はどういう仕組みで決めて、どういう風になっていくのか。統語構造は likes Mary が VP であり small vP でもあり(その間に Applicative Phrase があるという人もいて)、John がその specifier として挿入されるわけだが、この統語論の構造を出発点にして、対応する意味はどういうものであるのか、つまり統語構造が与えられたら、意味の規則・原理を適用した結果、文の意味が得られるが、それは Frege が言う意味の合成性(全体の意味は部分の意味から有限個の所定の計算式で決めることができるのであれば、無限個の意味の計算ができる)の問題である。根本のところを探る。

授業計画

| | |
|------|--|
| 第1回 | Introduction |
| 第2回 | Arguments, Valid Arguments, and Argument Schema |
| 第3回 | Logic and Meaning |
| 第4回 | Logical Constants and Logical Systems |
| 第5回 | Logic and Linguistics before the Twentieth Century |
| 第6回 | The Twentieth Century: Logical Form vs. Grammatical Form |
| 第7回 | Linguistics and Philosophy, Formal Languages |
| 第8回 | Propositional Logic |
| 第9回 | Predicate Logic |
| 第10回 | The Semantics of Predicate Logic |
| 第11回 | Interpretation by Means of Assignments |
| 第12回 | Universal Validity |
| 第13回 | Rules |
| 第14回 | Arguments and Inferences (1) |
| 第15回 | Arguments and Inferences (2) |
| 第16回 | 筆記試験 |

到達目標

人間のこころ／脳に表示される意味構造および意味と指示(現実世界)の対応関係を捉えようとする形式意味論の研究について鳥瞰図をえること。概念意味論、認知意味論、タイプ意味論にも目配りできるとよい。

履修上の注意

主として講義形式である。課題を出し、それを自分で調べて提出してもらうこともある。テキスト(英文)を分担して読み、ディスカッションにつなげたいが、英語論文を正確に理解することが出発点であることを心得ておくこと。

予習・復習

配布された印刷教材を事前に読み、疑問点、問題点について、授業で質問できるようにすることが望ましい。またノートや教材を読み返し、復習することも望まれる。

評価方法

予習・復習の有無、随時行うまとめの提出などを授業態度として筆記による定期試験の結果と合わせて評価する。学期末試験 70%、提出物 15%、授業態度 15%

テキスト

印刷教材を使用する。参考文献は随時紹介する。

参考文献: L.T.F. Gamut (1991) Logic, Language, and Meaning, Volume I: Introduction to Logic, Volume II, Intensional Logic and Logical Grammar, The University of Chicago Press, Chicago.